

国際共同研究事業スイスとの国際共同研究プログラム（JRPs） 事後評価結果

研究代表者所属機関・部局・職・氏名 早稲田大学・理工学術院・教授・渡邊 克巳

研究課題名：顔表情認知の文化差に関する発達認知神経科学的研究

評 価 結 果	
	S 想定以上に意義があった
○	A 意義があった
	B ある程度意義があった
	C ほとんど意義がなかった
所 見	
<p>本研究では、劇的なこれまでの仮説の否定、展開が論理的になされたとは考えにくい点もあり、自発的感情を表す機構についてどれだけ捉えられたか不明な点もあるが、意図的演劇的な表情表出として各文化が何をもって怒りや嫌悪となすのか、その捉え方の文化差はあぶり出されたと言える。しかし、なぜそうした違いが生じたかについては、今後の検討が待たれる。本研究はその一歩としての精緻な比較研究システムの方法論的確立、技法の開発に重点があり、その目的は国際共同研究事業として有意義に行われたものと評価できる。</p> <p>国際協働については、予算の多くを若手の育成・派遣に充てたことが挙げられる。成果リストにはそれら若手が第1著者を務める論文が多く並んでおり、本研究の意義を感じさせる。多くの日本人若手研究者が海外での共同実験施設の構築に携わった経験も、研究技術の向上にとって有意義であったと思われる。本研究による成果ということができる。一方、日本から渡航した研究者数に比べて相手国から来日した研究者は少なく、相互交流という観点からはやや残念である。</p> <p>本研究での最も大きな成果は、表情認知の異文化比較に使用できる表情動画データベースが構築されたことである。特に国際的な場において、表情コミュニケーションは重要な役割を持つ。コロナ禍でウェブ会議システムが普及したこともあり、表情研究の社会的需要は今後高まると予想される。本研究の成果である「同一環境で撮影された」「動的表情の」データベースはそれらの需要に応えるものであり、今後の表情研究の土台を作ったと言える。</p> <p>今後、このデータベースを公開し、広く研究に活用されることを期待する。さらに、本研究のタイトルにある「発達認知神経科学」の分野において本共同研究からどのような研究成果が発信されるのか、今後の研鑽に期待したい。</p>	